

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和6年7月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万5846トン、前年同月比95.7%、価格は1キログラム当たり285円、同105.3%となった(表1)。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万4432トン、前年同月比94.4%、価格は1キログラム当たり268円、同109.8%となった(表3)。
- 猛暑の影響により本州の産地では定植した物が枯れ、播種した物の発芽不良などが報告されているため9～10月は出回り不足になると予想される。果菜類は盆前に集中して9月はかなり少なくなる状況が予想される。

(1) 気象概況

上旬は、太平洋高気圧に覆われて日射が強かったことに加え、梅雨前線に向かって南から暖かい空気が流れ込んだ影響で、旬平均気温は全国的にかなり高く、旬平均気温平年差は東日本で+3.3℃、西日本で+2.9℃、沖縄・奄美で+1.4℃となり、いずれも1946年の統計開始以降、7月上旬として1位の高温となった。7日は静岡で日最高気温40.0℃を記録するなど、各地で記録的な高温となった。旬間日照時間は、前半は移動性高気圧に覆われて晴れた日もあったため、北日本太平洋側が多かった。後半、太平洋高気圧が西日本付近に張り出し、東・西日本太平洋側や沖縄・奄美を中心に晴れの日が多かったため、東日本太平洋側、西日本、沖縄・奄美で多かった。北日本日本海側で少なく、東日本日本海側では平年並だった。降水量は、前半は平年並みであったが、後半は梅雨前線が東北地方に停滞することが多かったため、北日本日本海側を中心に曇りや雨の日が多く、北・東日本日本海側で多く、北日本太平洋側、西日本日本海側では平年並だった。東・西日本太平洋側で少なかった。

中旬は、北日本ではオホーツク海の低気圧に向かって暖かい空気が流れ込みやすかったことから旬平均気温は高くなった。沖縄・奄美では太平洋高気圧に覆われて日射が強かったことなどにより、旬平均気温平年差は+1.8℃と1946年の統計開始

以降、7月中旬として1位の高温となった。東・西日本では平年並だった。旬間日照時間は、北日本日本海側と沖縄・奄美でかなり多く、北日本太平洋側が多かった一方、西日本で少なく、東日本では平年並だった。降水量は、移動性高気圧が北日本を覆うことが多く、梅雨前線は期間の中頃にかけて東・西日本に停滞し、14日は長崎県で線状降水帯が発生した。また、太平洋高気圧が沖縄・奄美を覆うことが多かったことから、北日本太平洋側でかなり少なく、北日本日本海側で少なかった一方、東・西日本で多く、沖縄・奄美では平年並だった。期間の終わりには次第に太平洋高気圧が東・西日本太平洋側に張り出し、九州南部では17日頃、関東甲信地方と東海地方では18日頃、四国地方では19日頃に梅雨明けした。

下旬は、東日本太平洋側と西日本を中心に太平洋高気圧に覆われて日射が強く、北日本を中心に低気圧に向かって南から暖かい空気が流れ込みやすかったため、旬平均気温は、北・東・西日本でかなり高く、沖縄・奄美では高かった。旬平均気温平年差は東日本で+2.8℃、西日本で+2.2℃となり、いずれも1946年の統計開始以降、7月下旬として1位の高温となった。29日は佐野(栃木県)で日最高気温41.0℃を記録するなど、各地で記録的な高温となった。太平洋高気圧が東日本太平洋側や西日本を覆うことが多く、中国地方と近畿地方では21日頃に、九州北部地方では22日頃に梅雨明けした(速報値)ため、旬間日照時間は、東日

本太平洋側と西日本でかなり多く、北日本太平洋側と東日本日本海側では平年並、北日本日本海側で少なかった。降水量は、西日本太平洋側でかなり少なく、東日本太平洋側と西日本日本海側で少なかった。一方、梅雨前線は東北地方に停滞することが多く、北日本を中心に低気圧や湿った空気の影響を受けやすかった。25日頃には山形県で線状降水帯が発生し、大雨特別警報が発表されるな

ど記録的な大雨となった所もあった。このため、北日本でかなり多く、東日本日本海側では多かった。沖縄・奄美では、期間の中頃に台風第3号の影響で大雨や大荒れとなった所もあったため旬降水量がかなり多く、旬間日照時間は少なかった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り(図1)。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本				日本海側 太平洋側			日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側
東日本				日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側
西日本				日本海側 太平洋側					

資料:気象庁「7月の天候」

1 平年を上回る水準			
2 平年並み			
3 平年を下回る水準			

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は10万5846トン、前年同月比95.7%、価格は1キログラム当たり285円、同105.3%となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向(7月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	105,846	95.7	81.7	285	105.3	116.8	265	286	305
だいこん	6,918	96.5	93.7	89	96.6	89.0	101	84	82
にんじん	5,059	98.6	89.0	181	123.8	113.1	192	185	167
はくさい	5,814	106.8	89.2	77	103.8	106.9	68	74	92
キャベツ類	15,546	102.3	94.3	77	79.3	92.8	70	79	82
ほうれんそう	752	90.6	84.0	701	109.4	113.6	578	695	906
ねぎ	3,366	98.2	98.6	336	100.2	89.6	331	343	333
レタス類	9,157	95.1	100.0	145	116.6	108.2	121	146	167
きゅうり	6,305	89.4	89.5	380	128.1	130.6	315	405	413
なす	3,028	84.0	93.3	391	109.0	103.7	339	401	432
トマト	6,451	97.1	90.0	362	97.0	107.1	338	370	376
ピーマン	2,004	96.5	99.4	441	88.6	95.0	380	430	529
さといも	100	98.0	69.9	493	83.0	104.4	525	427	533
ばれいしょ	3,651	90.6	80.1	254	145.3	138.0	260	247	254
たまねぎ	7,474	91.7	83.5	177	143.4	142.7	179	177	175

資料:東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1:平年比は過去5カ年平均との比較。

注2:豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、だいこんの価格が、中旬以降落ち着き、安めに推移した前年をやや下回り、平年をかなり大きく下回った（図2）。

葉茎菜類は、ほうれんそうの価格が、品質が不安定だった平坦地からの出荷がほぼ終了した下旬以降に上がり、やや高めに推移した前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく上回った（図3）。

果菜類は、きゅうりの価格が、関東産が切り

上がった中旬以降から堅調な推移となり、前年を3割近く上回り、平年を3割強上回った（図4）。

土物類は、ばれいしょの価格が、高温の影響により消費は停滞しているものの絶対数不足から高値が続き、前年を4割以上上回り、平年を4割近く上回った（図5）。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 だいこんの入荷量と卸売価格の推移

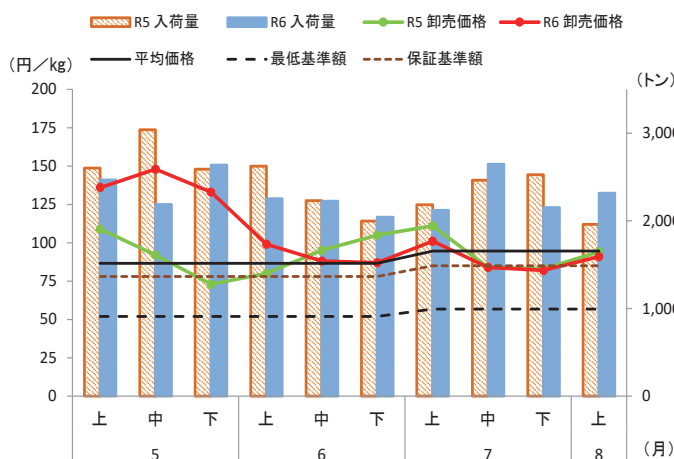


図3 ほうれんそうの入荷量と卸売価格の推移

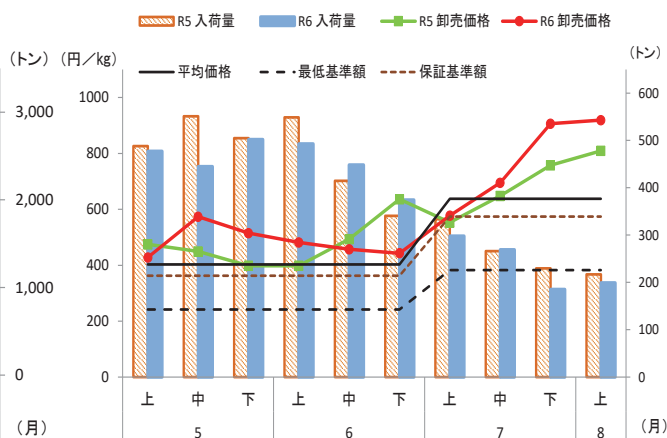


図4 きゅうりの入荷量と卸売価格の推移

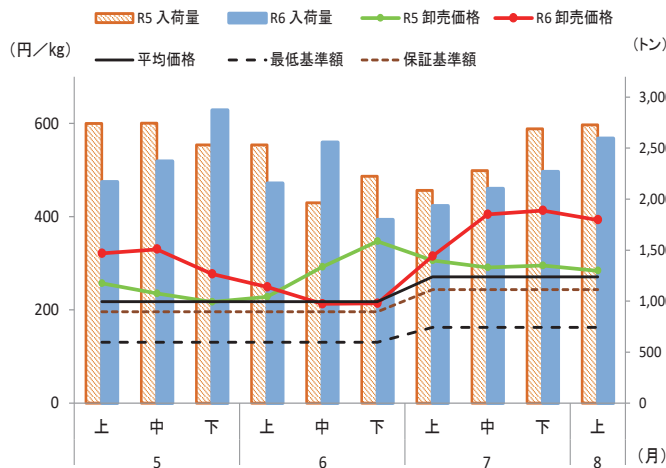
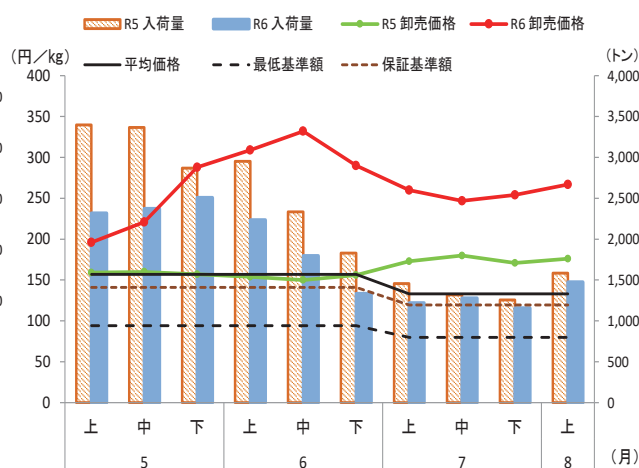


図5 ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	7月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>青森産、北海道産中心の入荷となった。青森産の作付面積は前年並みで、一部圃場^{ほじょう}で生理障害による「こぶ」などの症状が散見されるものの、おおむね順調となった。北海道産の作付面積は前年並みで、高温により生育は前進傾向となった。総入荷量は前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は中旬以降落ち着き、安めに推移した前年をやや下回り、平年をかなり大きく下回った。</p>
	にんじん 	<p>青森産を中心に北海道産の入荷があった。青森産の作付面積は前年並みで、4月までの低温により遅延していた生育は、その後の気温の上昇で回復した。一部欠株や生育不良が見られるものの、おおむね順調であった。北海道産の作付面積は前年並みで、生育は天候にも恵まれ順調だった。中国産の輸入は前年を7割以上上回っている。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>価格は堅調な動きが続き、やや安めに推移した前年を2割以上上回り、平年を1割以上上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、4月の天候に恵まれ生育は順調で、やや前進傾向となった。総入荷量は大幅に少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は中旬以降上がり、高めに推移した前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	キャベツ類 	<p>群馬産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、5月の降霜と強風により一時生育が停滞していたものの、その後の降雨と気温の上昇により生育は回復しおおむね順調となった。総入荷量は少なかった前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は高めに推移した前年を2割強下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>群馬産、栃木産など関東の高冷地のハウス物中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年をやや上回り、生育はおおむね順調も、高温障害の影響により生育にばらつきが見られた。栃木産の作付面積は前年並みで、生育は順調も高温による生育停滞が散見された。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は、品質が不安定だった平坦地からの出荷がほぼ終了した下旬以降に上がり、やや高めに推移した前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
	ねぎ 	<p>茨城産を中心に後続の北海道産、東北産の出荷が開始した。茨城産の作付面積は前年並みで、遅延していた生育はその後の天候に恵まれて回復し、おおむね順調で太りも回復傾向となった。北海道産、東北産の作付けは前年並みで、降雨による軟腐病^{なんぷびょう}やべと病が散見されるものの肥大はよく、生育はおおむね順調となった。総入荷量は前年並みであった前年をわずかに下回った。</p> <p>価格は月間を通して大きな動きはなく、安めに推移した前年並みとなり、平年をかなりの程度下回った。</p>
	レタス類 	<p>長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、3月の天候の影響により遅延していた生育は、その後の気温上昇と定期的な降雨によって回復し順調であった。総入荷量はやや多かった前年をやや下回り、前年並みとなった。</p> <p>価格はそれまでの安値傾向が残っていた中旬以降に上がり、やや安めに推移した前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>福島産を中心に岩手産、秋田産など東北産を主力とした入荷となった。福島産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も病虫害の影響により収量はやや少なくなった。岩手産の作付面積は前年並みで、一部べと病やアブラムシが散見されたが、大きな影響はなくおおむね順調だった。秋田産の作付面積は前年並みで、定植後の生育遅れは解消されつつあり、おおむね順調となったが、一部枯れ症状が散見された。総入荷量は前年並みであった前年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、関東産が切り上がった中旬以降から堅調な推移となり、前年を3割近く上回り、平年を3割強上回った。</p>
	なす 	<p>群馬産を中心に栃木産など関東産の露地物の入荷となった。群馬産の作付面積は前年をやや上回り、生育はおおむね順調もハダニ、アザミウマなどの虫害が散見され、作況はあまりよくない。栃木産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、花落ちなどの生理障害が散見され、ハダニ、アブラムシなどの虫害が散見された。総入荷量は多かった前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は西南暖地産の入荷が切り上がった中旬以降に堅調な動きとなり、やや安めに推移した前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。</p>
	トマト 	<p>北海道産を中心に岩手産、青森産などの入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だった。岩手産の作付面積は前年並みで、一部圃場で灰色かび病やタバコガなどの病虫害が散見されたがおおむね順調だった。6月の天候の影響によりやや前進傾向となった。青森産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調で、尻腐れ果が散見されたが前年ほどではない。総入荷量は少なめに推移した前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は関東産が切り上がった中旬以降に堅調な動きとなり、高めに推移した前年をやや下回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	ピーマン 	<p>茨城産、岩手産中心の入荷となった。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、遅延していた生育は回復して順調となった。一部、高温障害が散見された。岩手産の作付面積は前年並みで、一部圃場でアブラムシ、タバコガなどの虫害が散見されるものの、おおむね順調となった。総入荷量はやや多かった前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、茨城産が切り上がりに向かった中旬以降に上がったものの、高めに推移した前年をかなり大きく下回り、平年をやや下回った。</p>
土物類	さといも 	<p>鹿児島産、宮崎産中心の入荷となった。鹿児島産の作付面積は前年並みで、天候不順の影響により収穫作業の遅れが見られたものの、切り上がりが早く量が少なかった前年より数量は増えた。宮崎産の作付面積は前年並みで、天候の影響により生育、収穫作業にかなりのばらつきが生じている。中国産の輸入は前年を大きく上回っている。総入荷量は大幅に少なかった前年をわずかに下回り、平年を3割以上下回った。</p> <p>需要期から外れているため価格の動きは良くなかったものの、堅調に推移し、大幅に高かった前年を大幅に下回り、平年をやや上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>茨城産を中心に北海道産の入荷もあった。茨城産の作付面積は前年並みで、生育は順調であった。北海道産の作付面積は前年並みで、温暖な気候と適度な降雨の影響により前進傾向となった。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を2割ほど下回った。</p> <p>価格は、高温の影響により消費は停滞しているものの絶対数不足から高値が続ぎ、前年を4割以上上回り、平年を4割近く上回った。</p>
	たまねぎ 	<p>兵庫産を中心に佐賀産、北海道産の入荷があった。兵庫産の作付面積は前年並みで、収穫は終了している。4月までの豪雨によって病害が散見された。佐賀産の作付面積は前年並みで、6月で収穫は終了している。4月の天候不順により中晩生の作柄は良くない。北海道産の作付面積は前年並みで、温暖な気候と適度な降雨により生育は前進した。中国産の輸入は前年の2.6倍以上となっている。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は、月間を通して堅調な動きとなり、前年、平年とも4割以上上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万4432トン、前年同月比94.4%

価格は1キログラム当たり268円、同109.8%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(7月速報)



品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	34,432	94.4	91.4	268	109.8	116.3	242	273	289
だいこん	2,671	87.9	92.4	88	101.1	90.8	98	87	80
にんじん	2,245	98.8	100.8	182	124.7	112.2	185	189	173
はくさい	2,486	94.5	87.8	89	114.1	118.8	78	84	107
キャベツ類	4,963	102.9	92.6	85	80.2	98.2	77	88	90
ほうれんそう	317	102.3	83.9	789	105.8	114.2	690	815	877
ねぎ	630	99.1	107.3	477	97.7	101.2	426	497	499
レタス類	1,919	84.8	83.3	149	118.3	113.0	124	157	167
きゅうり	1,602	81.9	89.0	402	130.5	141.1	342	420	431
なす	790	78.4	80.1	368	111.2	117.6	311	396	403
トマト	2,121	94.7	97.8	368	102.2	108.4	338	371	385
ピーマン	616	93.9	104.1	439	99.3	109.4	368	456	491
さといも	28	96.6	75.7	479	90.9	103.4	546	468	418
ばれいしょ	1,751	98.5	83.7	284	166.1	151.1	278	286	287
たまねぎ	4,460	104.4	99.2	170	150.4	145.6	165	166	181

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	7月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	北海道産を中心に、青森産や岐阜産も主体となる入荷となった。降雨の影響などにより品質低下品が多く見られ、積極的に取り扱えなかったことで入荷量は伸び悩んだ。北海道産と青森産は月間の入荷量が前年を大幅に下回り、岐阜産も前年を下回った。月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年をかなりの程度下回った。 品質低下品が見られたことから販売に苦戦し、価格は旬を追うごとに下落した。月間では前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度下回った。
	にんじん 	青森産と北海道産が中心となる入荷であり、月の前半は和歌山産の残量入荷もあった。北日本の各産地は、干ばつの影響により小玉傾向で産地出荷量が伸びず、青森産の入荷量は月間で前年を大幅に下回り、北海道産も前年をかなり下回った。国産の不足感と高値傾向から、業務関係を中心に輸入の中国産の入荷が増え、前年の2倍以上となった。月間全体では前年をわずかに下回り、平年をわずかに上回った。 太物の不足感から価格は高値傾向で推移した。月間では前年を2割以上上回り、平年をかなり大きく上回った。

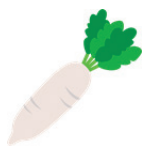
葉茎菜類	はくさい 	<p>長野産中心の入荷であった。月の前半は干ばつの影響があったが、中旬以降に降雨があり、南佐久地域を中心に下旬に向けて回復傾向となった。全体としては旬を追うごとに減少傾向となり、月間では前年をやや下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>価格は、加工筋の発注が順調であったことから旬を追うごとに上伸した。品薄感もあり、月間では前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に上回った。</p>
	キャベツ類 	<p>群馬産が中心となり長野産も主体となる入荷であった。各産地とも干ばつの影響により小玉傾向で、産地出荷量は伸び悩んだ。長野産は下旬に落ち込み、月間では前年を大幅に下回ったが、群馬産は旬を追うごとに増加傾向となった。月間全体では前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>気温高により消費が伸びず、入荷量が少ない中でも価格は伸び悩んだ。小玉傾向のため販売に苦戦し、月間では前年を2割近く下回り、平年をわずかに下回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>岐阜産が中心となる入荷であった。高温の影響により生育不良で産地出荷量は伸びず、物流問題もあって入荷は不安定となった。月間全体では少なかった前年をわずかに上回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>量販店での特売などが少なく、定番の発注のみで、入荷量が少ない中でも価格は伸び悩んだ。不足感から中旬以降に高騰し、月間では前年をやや上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
	ねぎ (白ねぎ) 	<p>月の前半は茨城産、後半は北海道産が中心となり、鳥取産も月を通して主体となる入荷であった。茨城産は切り上がりが早く、月間では前年を大幅に下回ったが、他産地は順調な入荷が続いた。月間全体では前年をやや下回った。</p> <p>価格は大きな変動なく安定した推移となった。月間では前年をわずかに上回った。</p>
	ねぎ (青ねぎ) 	<p>徳島産と香川産が主体となり、高知産や近隣の奈良産、大阪産などの入荷もあった。細ねぎは高知産と静岡産が主体となった。各産地とも日中の高温で葉先枯れなどが生じ、品質悪化から下位等級品が中心の入荷となった。月間全体の入荷量は前年並みであった。</p> <p>価格は夏場の需要期を迎える中でも下位等級品が多かったことから伸び悩み、旬を追うごとに上伸しつつも、月間では前年並みとなった。</p>
	レタス類 	<p>玉レタスは長野産が中心となる入荷であった。干ばつ傾向から生育が悪く、産地出荷量が少ない状況が続いた。旬を追うごとに微増傾向ではあったが、月間では前年をやや下回った。サニーレタスも長野産が中心となり、干ばつ傾向から産地出荷量が少ない状況が続いた。月間の入荷量は前年をかなり下回った。リーフレタスも長野産が中心となり、玉レタスやサニーレタス同様、干ばつの影響により産地出荷量が少ない状況が続いた。旬を追うごとに増加傾向ではあったが、絶対的な量が少なく、月間では前年を大幅に下回った。レタス類全体での入荷量は、前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は玉レタス、サニーレタス、リーフレタスとも不足感がある中で、各所からの引き合いが強く高値推移となった。レタス類全体では前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
果菜類	きゅうり 	<p>福島産が中心となる入荷であった。出荷最盛期で旬を追うごとに増加傾向ではあるものの、高温のため産地出荷量が少なく伸び悩み、前年をかなり下回った。長野産などの入荷もあったが同様に少なく、前年を大きく下回った。全体では前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>価格は不足感から高値推移となり、量販店の引き合いが強いことに加えて、「きゅうりの一本漬け」など夏の定番の屋台需要も多く、旬を追うごとに高騰した。月間では前年を3割以上上回り、平年を4割以上上回った。</p>

	<p>なす</p> 	<p>千両系はこの時期主力の大阪産、京都産、群馬産、徳島産などの入荷があった。長なすは主力の愛媛産に加えて茨城産などの入荷もあった。前月末から上旬にかけて出荷が集中したため、中旬以降減少し、各地梅雨と高温により出荷が急減した。各産地とも入荷量は少なく、月間全体では前年を2割以上下回り、平年を2割近く下回った。</p> <p>価格は不足感から高値推移となり、旬を追うごとに上伸して海の日前に高騰した。月間では前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に上回った。</p>
	<p>トマト</p> 	<p>岐阜産を中心に愛知産の残量や熊本産などの入荷もあった。岐阜産は順調な出荷で旬を追うごとに増加した。夏秋産地の愛媛産の入荷も始まり、岡山産も下旬にスタートした。夏秋産地は小玉傾向で出始めは伸び悩み、愛媛産、岡山産とも月間では前年を大幅に下回った。月間全体では前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は夏秋産地の入荷量が伸びないことから旬を追うごとに上伸し、月間では前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	<p>ピーマン</p> 	<p>宮崎産が中心となり茨城産など各地から入荷があった。月の前半は潤沢であったが、宮崎産は旬を追うごとに減少し、他産地も伸び悩んだ。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は不足感から旬を追うごとに上伸し、高かった前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
<p>土物類</p>	<p>さといも</p> 	<p>上旬までは産地残量が多い鹿児島産の入荷が多くあったが、下旬には切り上がった。月間では前年を大きく上回った。中旬以降は宮崎産の入荷が始まったが産地出荷量が少なく伸び悩んだ。月間では前年の半分以下となった。入荷量自体は輸入の中国産が主体となったが、旬を追うごとに減少傾向となった。月間全体では前年をやや下回り、平年を2割以上下回った。</p> <p>気温高で需要は少なく、入荷量が少ない中でも価格は伸び悩んだ。旬を追うごとに下落傾向となり、月間では前年をかなりの程度下回り、平年をやや上回った。</p>
	<p>ばれいしょ</p> 	<p>丸芋は、上中旬は茨城産が中心となり、中旬以降に北海道産の入荷が始まり下旬には中心となった。茨城産は順調な入荷が続き、月の前半は前年をかなり上回ったが下旬には切り上がった。北海道産は降雨の影響により産地出荷量は伸び悩んだ。メークインは月の前半は関東産や九州産の入荷があったが切り上がり、その後は下旬にスタートした北海道産が主体となった。北海道産は出荷回りが少なく入荷量は伸び悩んだ。ばれいしょ全体では前年をわずかに下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は前月までの高値の影響が残る中で、産地の切り替わり時期に入荷量が伸びなかったことから、高値のまま推移した。月間では前年を6割以上上回り、平年を5割以上上回った。</p>
	<p>たまねぎ</p> 	<p>兵庫産が中心となる入荷であった。前年に比べて即売物の産地からの入荷が少なく、中旬以降は旬を追うごとに減少した。前年の北海道産の不作により続いていた品薄感と高値の影響で、業務関係は輸入の中国産に切り替えたところが多く、中国産の入荷も続いた。月間全体では前年をやや上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は前月まで続いていた高値の影響が残る中、不足感から中旬以降に上伸し、下旬には高騰した。輸入の中国産の価格も、現地価格が高いことや輸送コストと為替の影響もあり、国産との価格差は小さかった。月間全体では前年を5割以上上回り、平年を4割以上上回った。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした9月の見通し

猛暑の影響により本州の産地では定植した物が枯れ、播種した物の発芽不良などが報告されており、このため9～10月は出回り不足になると予想される。果菜類は昨年と同じ展開で、盆前に集中して9月はかなり少なくなる状況が予想される。このため冷涼産地からの出荷に期待がかかる展開が予想される。



根菜類

だいこんは、北海道産（標茶）の現状は計画通りで徐々に増えてきている。8月にピークを迎え、9月は引き続き多いが、下旬には少なくなると予想される。天候は干ばつ気味だったが、7月下旬後半になって解消された。北海道産（留寿都）は、これまでは平年並みの出荷で、2Lサイズ中心である。7月下旬にやや降雨が多かったことから、その後に高温になり過ぎると歩留まりが悪くなる可能性があるともみている。出荷量は8月まで現状のペースで推移するが、9月はばれいしょの収穫作業に時間を割くため、やや減ると予想される。青森産の夏だいこんは7月に前進し、8月はかなり少なく、9月中旬から再び増えて、10月の秋だいこんにつながっていくと予想される。作付けは前年並みである。

にんじんは、北海道産の作柄は平年より多く豊作気味を予想している。干ばつ気味で、にんじんにとっては良好な環境であった。現状はLサイズ中心でほぼ定量出荷で推移するが、9月にはやや大きくなると予想している。11月の初め頃には切り上がると予想される。



葉茎菜類

キャベツは、群馬産の現状の出荷は平年並みで、梅雨明け後は気温高となっているが、生育には特別影響はない。8月は増加傾向で推移し、9月に入ってピークとなると予想される。出荷は前年並みで、数量が大きく変動することはないと予想される。岩手産も現状では順調であり、

7月下旬後半の降雨も問題なかった。8月に入ってピークとなり、9月まで横ばいで順調に推移すると予想される。

はくさいは、長野産が盆明けから増え始め、9月下旬から10月がピークと予想される。現状は特別暑さの影響はない。今年は作付けを減らした分、少なくなると予想される。

ほうれんそうは、岩手産の現状は盛夏期を過ぎて、出荷は6月の80%まで落ちてきた。播種作業は順調であり、盆明け頃から再び増えて、9月にピークが来ると予想される。7月下旬の後半に降雨が続き、その後は病気が出やすく、害虫が発生する懸念はある。8月の天気は回復する予報のため、それ程心配は要らないと予想される。群馬産は、高温の影響により細く、伸びも止まっている。現状は例年を下回る出荷になっているが、回復は早く、9月には平年並みを予想している。播種作業は順調である。岐阜産の現状は平年よりもやや少なめの出荷となっている。8月はさらに減り、増え始めるのは9月下旬から10月にかけてで、ほぼ前年と同様の展開が予想される。栃木産は8月に入り減り始めるが、最も減少するのは9月中旬で、下旬も再び増えることはないと予想される。夜温が高く、発芽不良であることが影響している。前年は引き続き10月も少なかったことから、前年に似た動きになると予想される。

ねぎは、青森産の早出し物は8月初めから始まるが、通常作は9月に入ってから増えると予想される。9月が全体のピークであり、12月中旬まで出荷は続くと予想される。作付けは前年並みで、主力品種の「夏扇パワー」は2Lサイズ中心と予想している。天候は今のところ問題はないが、湿度が高すぎると軟腐病の発生の心配がある。北海道産の現状は始まったばかりで、9月に入ってから本格化し、ピークは10月まで続くと予想される。作付面積は前年並みで、11月いっぱい切り上がると予想される。生育は順調で、前年は特別暑さの影響で少なくなることなかった。

レタスは、長野産は標高650～700メートル地帯にある園地は8月中下旬から再びピークになると予想される。定植もしており、時々降雨があるため大きな問題はない。前年のこの時期はやや減ったが、今年は平年並みに9月にピ

ークが来て10月中下旬に切り上がると予想される。作付けは若干減少している。群馬産は7月末の段階で、降雨続きと高温の影響により例年の半分程度まで激減した。定植は引き続き行われているが、苗の焼けも見られ9月上旬まで少なめの展開で、9月中旬から例年並みに回復すると予想される。

果菜類



きゅうりは、福島産は梅雨入り前に多く出荷された影響により7月末の段階では少なくなっている。樹勢が弱ったところで梅雨入りしたため、回復に時間を要している。ハウス物は8月下旬に回復し、9月にかけて再度ピークが予想される。露地物は8月上旬にピークが来て中下旬には減ってくるが、9月いっぱいには出荷できると予想される。生育は順調で、干ばつが厳しく8月下旬に切り上がった前年を上回ると予想される。群馬産の抑制物は、早い物では8月末頃から始まると予想される。9月20日頃に全生産者の出荷がそろうため、例年と同様、9月に急増し、その後は一定のペースで10月まで続くと予想される。作付けは例年並みである。

なすは、栃木産の現状は高温で花落ちしているため予想出荷量の70%と少ない。このまま回復せず、少なかった前年をさらに下回る展開も予想される。今後の天候によっては9月には増える可能性もあるが、ほとんど期待できないであろう。切り上がりは降霜で決まる。茨城産は高温の影響により数量は伸び悩んでいる。夕立が多く、雨に打たれて傷みが出ている。8月は横ばいか減りながら推移し、9月はさらに減ると予想される。雹害^{ひょうがい}で少なかった前年を上回ると現時点では予想される。福岡産の長なすは8月末から夏秋物が始まり、10月には冬春物となるが、作付けはやや減少している。梅雨の降雨はそれ程でもなく、生育は順調である。

トマトは、青森産の現状は平年並みの展開で、盆前頃にピークが来て8月下旬から9月も例年並みの展開と予想される。7月下旬は降雨が続いたが、その後は回復すると予想される。愛知産は例年並みに9月20日前後から出荷が始まり、9月の市場出荷はまだまだ少なく、本格的

には10月に入ってからと予想される。年内は11月後半に急増する時期があると予想される。群馬産の夏秋トマトは現状、例年並みの出荷となっている。8～9月は暑さの影響による花落ちや尻腐れなどにより、例年を下回る出荷が予想される。例年であれば11月中旬まで出荷できるが、今後の天候次第である。北海道産のミニトマトは現状、例年並みの出荷となっている。前年の9月は大幅な前進と成り疲れにより30%程度の減収となった。今年も高温であれば少なめの出荷になると予想されるが、今のところは通常通りを想定している。品種は「キャロル10」である。

ピーマンは、岩手の県北の産地の露地物は、7月下旬に梅雨終盤の降雨が多くなっているものの、それなりに収穫はできている。8月にピークとなり、9月は前年を上回る出荷が予想される。前年は尻腐れが多く出たが、今年は今のところ問題ない。ハウス物も順調である。茨城産の抑制物（秋ピーマン）は9月に入って本格的に始まると予想される。7月に入って定植が開始し、その後の生育は順調である。この抑制物は11月まで続くと予想され、今のところ大きな問題はないが、前年は暑さの影響により10%程度の減収となった。



土物類

さといもは、静岡産の「石川小芋」は例年と同様に8月20日過ぎから始まると予想される。3月の定植後、発芽がやや遅かったため、地上部の背丈が例年より小さめで、芋の仕上がりは例年より小粒になることが予想される。本格的に増えるのは9月に入ってからで、業務用需要に應えるため、11月末まで計画的に出荷されると予想される。中心サイズはLを予想している。千葉産の「石川早生」のスタートは前年より遅く、7月下旬の後半から始まった。空梅雨傾向と高温により、やや小ぶりの仕上がりである。ピークは盆明けから9月中旬で、9月いっぱい切り上がると予想される。2Lサイズが中心である。

ばれいしょは、北海道産（ようてい）の「男爵」は平年並みに8月3日から出荷開始の予定

である。選果は8月2日開始で、肥大については未だ把握できていないが、全般に干ばつ傾向であったことから、小ぶりの仕上がりが予想される。北海道産（芽室）の市場出荷は「とうや」が盆明けから、「メイクイン」は例年と同様8月下旬から開始すると予想される。作柄は前年のような豊作ではなく、若干の小振りの仕上がりを予想している。

たまねぎは、北海道産は8月に入ってから始まるが例年よりやや早い見込みである。作柄は平年作よりも良く、豊作気味で、中心サイズはL大である。ピークは9月から年内いっぱい予想される。



その他

ブロッコリーは、北海道産（十勝）は現状は干ばつが続いており、例年の半分程度と少なくなっている。7月下旬の降雨でやや回復するも、苗が枯れるなどしているため、8月下旬から9月上旬は少なくなり、回復は9月中旬以降と予想される。作付けは前年の90%と減っている。最終出荷は10月末までと予想される。北海道産（女満別）は7月末に出荷のピークは過ぎたが、8月上旬までまとまって多く、盆明けには減ると予想される。9月は少ないまま推移し、20日頃から増えてきて10月10日前後にボリュームを盛り返し、その後は月末に向けて減ると予想される。作付けは前年の60%と減っており、量的には前年を下回ると予想される。比較的低温傾向で、病害は見られない。7月にはゲリラ豪雨もあり、土壌水分は問題ない。長野産は9月中旬から再び増え始め、10月初め頃にはピークを迎えると予想される。作付けは前年並みで、11月初め頃に切り上がると予想される。

カリフラワーは、新潟産は9月中旬から例年と同様に始まり、12月まで続くと予想される。作付けは前年並みだが、前年の出荷は猛暑により少なかった。

セルリー（セロリ）は、長野産の露地物は8月にピークとなるが、やや安定性に欠け、9月に入り増えると予想される。8月に特に減り、

9月に平年並みとなった前年と似た展開になると予想される。

かぼちゃは、北海道産は例年と同様に9月上旬から始まり、11月に出荷の休みに入り、12月には冬至の需要に向けてピークになると予想される。品種は引き続き「くりゆたか」で、作付けは前年比微増である。定植時期から天候に恵まれて順調で、やや干ばつ気味であるが着果に問題はない。

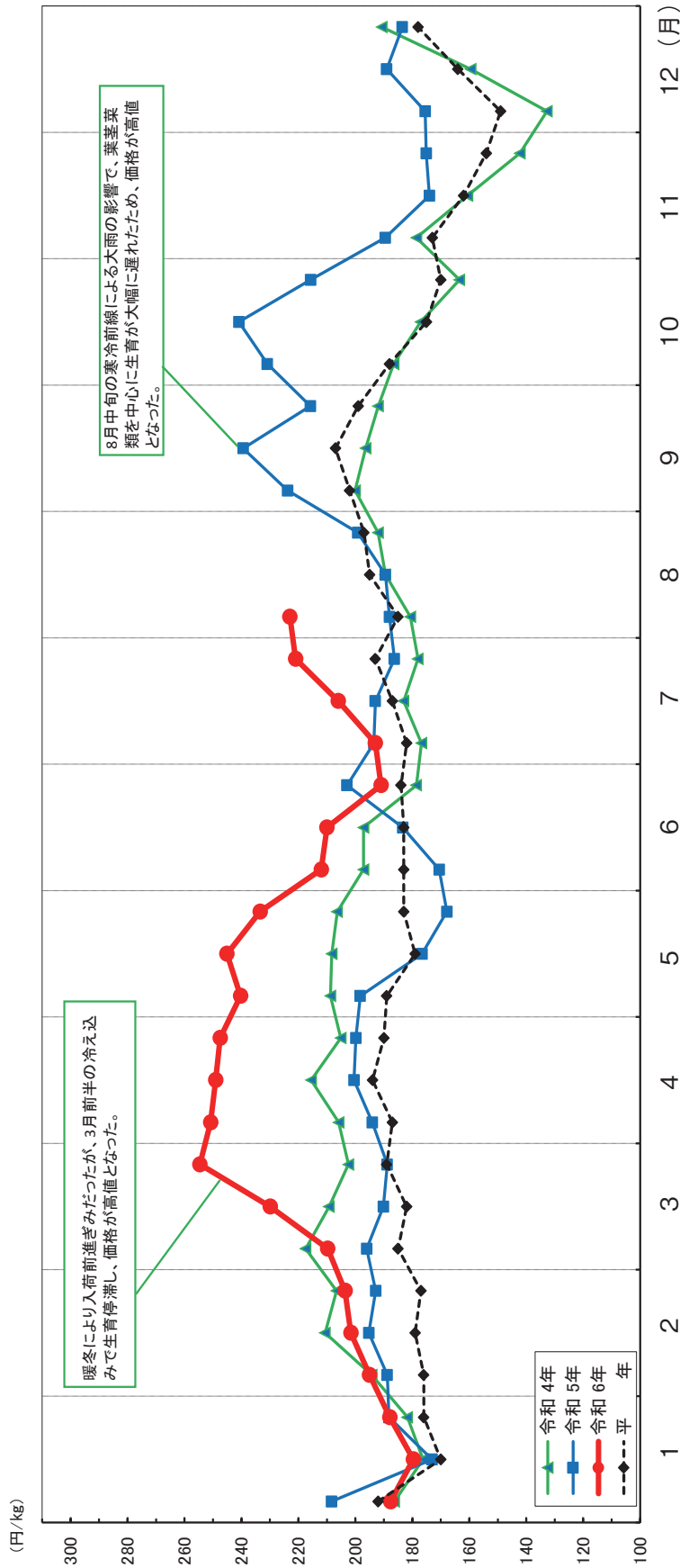
かんしょは、千葉産は8月上旬から例年並みに始まり、9月は増えながら推移し、10月にピークになると予想される。品種は「紅あずま」と「シルクスイート」である。作柄は、7月後半に降雨が少なかったことが懸念材料である。徳島産は現状では平年並みの出荷状況である。若干小振りで、一階級程小さめであるが、8～9月と収穫が進むに連れて肥大は追いついてくると予想される。その後収穫はピークとなるが、9月には貯蔵作業やだいこんの準備で出荷量が落ちるといふほ例年と同様の展開になると予想される。茨城産は盆明けから出荷が始まるが、増えるのは9月に入ってからと予想される。出荷開始頃の品種は「紅ゆうか（べにはるか）」である。平年作を予想し、出荷開始時は小振りと予想される。

さやいんげんは、福島産の4～5月の定植物は8月にかなり少なくなって、端境期を迎える。7月の定植物は9月中旬から増えて9月下旬にピークを迎えると予想される。前年は^曇曇き直しなど大幅に遅れて半作程度となったが、今年は早めに定植することでリスクを減らすようにしている。品種は^{ひらまや}平莢のジャンボタイプが中心である。

にんにくは、青森産の収穫後乾燥した物の販売は8月下旬か9月初め頃からと予想される。今年の作柄は平年作であり、大きさも平年並みである。

（執筆者：千葉県立農業大学校
講師 加藤 宏一）

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

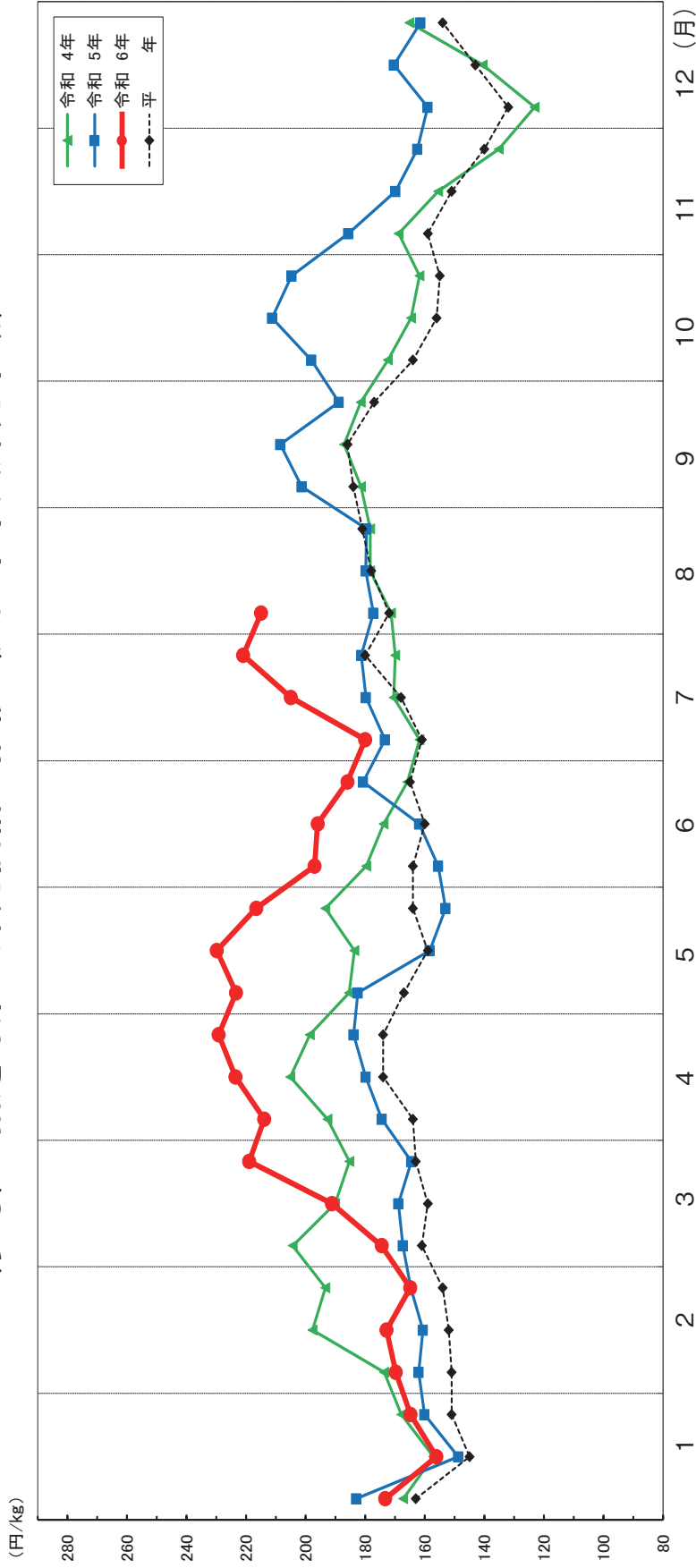
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月															
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬														
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200	196	192	187	177	163	179	161	142	133	160	191		
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	175	189	184		
令和6年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	247	240	245	233	212	210	191	193	206	221	223																
平年	192	170	176	176	179	177	185	182	189	187	194	190	189	179	183	183	183	184	182	187	193	185	195	197	202	207	199	188	175	170	173	162	154	149	164	178		

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（令和元年～令和5年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬												
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215														
平年	163	145	151	151	152	154	161	159	163	164	174	174	167	159	164	160	165	161	168	180	172	178	181	184	186	177	164	156	155	159	151	140	132	143	154	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（令和元年～令和5年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。